

## 山本三春『フランスジュネスの反乱—主張し行動する若者たち』(注1)

安藤 はる子

愛知みずほ大学人間科学部人間科学科

今回は、「社会と文化（異文化論）」の講義の教材としても使用している本を、1冊紹介したい。

この本の著者山本三春氏は、新聞記者として長くフランスを担当し、パリ特派員を経て、現在はフリーのジャーナリストとして、パリを拠点に活動している。

この本は、フランスで最近起こった2つのできごとを取り上げている。一つは、2005年秋に起こった、都市郊外の若者たちを中心にした暴動であり、もう一つは、2006年春に起きた、若者の雇用に関する法案をめぐる、フランス全土の若者たちによる反対運動である。

山本氏は、この二つのできごとを別個のものとしてとらえるのではなく、「若者たちの反乱」というユニークな視点からトータルにとらえ、それぞれのできごとについてくわしくルポしている。

それでは、この本に即して、この2つのできごとがどのようなものだったのかを紹介したい。

### 1) 都市の郊外の若者たちによる暴動について

この暴動については、本書では、第1章・第2章において取り上げられている。

2005年10月27日、パリの郊外で、警察に追われた2人の少年が変電施設に逃げ込み、そこで感電死した。その後、この事件は、政府の対応のまずさもあり、都市の郊外に住む、特に移民の家庭の子供たちによる、全国的な規模の暴動へと発展したのだ。

亡くなった二人の少年は、一人はアラブ系の17歳の少年ジェドであり、もう一人は、アフリカ系の15歳の少年ブーナである。ジェドの一家は、チュニジアからフランスにやって来た。ブーナの家族は、モーリタニアとマリ国境地域からやって来た。フランスは、アフリカの多くの国々を長い間植民地支配していた国である。これらの諸国が独立した今も、これらアフリカ諸国からきた移民の人たちが、フランスには多く在住している。彼らは概して貧しく、都市郊外に建てられた低家賃

の団地に住むことになる場合が多い。二人の少年の家族も、こんな典型的な移民の家族だった。

ではどうして、移民の家庭の少年たちと警官隊との間に起きた事件が、これほど大きな暴動にまで発展したのだろうか？

フランスは、一般に日本で考えられているよりずっと多く外国人が住んでいる国である。人口の約1割が外国人とも言われる。第二次世界大戦以前は、ヨーロッパからの移民が多かったが、第二次大戦以降、また特にアフリカの諸国が独立して以降、アフリカからの移民が急激に増えた。その中でも、北アフリカの、マグレブと総称される、アルジェリア、モロッコ、チュニジアからの移民が多く、彼らは大多数がイスラム教徒である。先程も指摘したように、これらの移民の家庭は貧しい場合が多く、様々な生活の困難を抱え、学校を落ちこぼれ、非行に走る少年たちもいる。このような都市郊外の治安を取り締まるため、特に2002年、右派が政権を握って以降、住民に身近な警察官を減らし、強圧的な治安部隊を増やした。亡くなった二人の少年ジェドとブーナは、サッカーが大好きなごく普通の男の子で、何か犯罪を犯したわけではなく、たまたま何かの理由で警官隊に追われるはめになり、危険な変電施設に入り込み、そこで感電死するという恐ろしい最期を迎えてしまったのだ。

このあと、現在のフランスの大統領、当時は内相であったサルコジが、警官隊の非を認め謝罪するどころか、二人の少年を含む都市郊外の少年たちを「社会のくず」(注2)呼ばわりしたことによりこの事件は一気に、全国的な規模の暴動へと拡大してしまったのだ。

私たち外国人にとっては、なぜあそこまで暴動が拡大したのか、なかなか理解しがたいのだが、その原因は非常に根深いようだ。

この暴動が起きた2005年10月以降、日本のメディアでも、この暴動について連日大きく報道された。移民社会フランスの抱える様々な問題点、

荒れた都市郊外の団地の様子、車を破壊し、氣勢をあげる少年たち等々……。その報道の中で一貫して論じられていたのは、(特に貧しい) 移民の人々が、一般のフランス社会から孤立し、差別され、両者をつなぐパイプをいまだ見つけることができないフランス社会の現状についてだった。(注3)

このような報道を見聞きしながら私が感じたのは、この暴動について、本当の所は一体どうなっているのだろうという疑問だった。そんな疑問にとても真摯に答えてくれたのがこの本だった。

山本氏は、フランスの一般の人たちには「危険な場所」として敬遠されている、最初の事件が起こった荒廃した郊外の団地に単身でかけ、最初は冷たい住民たちの視線にも動じることなく、じょじょに彼らの信頼をえていく。そして、亡くなった少年たちについて、また、彼らの置かれている環境について、根気よく、ていねいに取材していく。そのルポを読むことによって、私たちははじめて、感電死した少年たちの等身大の日常の姿、劣悪な環境の中でも子供たちを守っていこうとする大人たちの様々な努力(注4)、あくまでも上から押さえつけようとする、きめ細やかさのない政府の政策や対応などを知ることができる。そして、そのことによって、ただ単に荒れているだけでは決してない、都市郊外の移民の人たちの生活の実態を知ることができるのだ。

## 2) 「若者の雇用に関する法案」に対する若者たちの反対運動について

この本の第3章以降のすべての章は、この話題について書かれている。

日本では、1990年代のはじめにバブルがはじける前までは、若者の失業問題は、ほとんど大きな社会問題にはならなかった。しかし、最近では、若者の就職難の問題は、連日、メディアで報道され続けている。

フランスにおける失業問題は、日本よりかなり前から大きな社会問題となっている。1970年代前半のオイルショック以降、フランスは慢性的に失業率の高い国になった。これに対してフランス政府は、様々な失業対策を打ち出してきたが、なかなか抜本的な解決には至っていない。現在、フランスの若者の失業率は一般の失業率(10%前後)よりはるかに高く、20%を超えるとも言われている。このような現状の中、2006年1月、政府は一つの若者の雇用に関する法案を提出した。この法案は「初期雇用契約」と呼ばれるものである。こ

の法案の内容は、「26歳未満の若者を雇用した企業は、3年間にわたって社会保障負担を免除され、これまで1~3ヶ月だった新人社員実習期間も2年間に延長、その間は理由説明なしで自由にこの若者を解雇できる」(注5)というものだった。

この法案が提出されるや否や、まず労働組合の側から、この法案に対する反対表明がなされた。この法案は、企業を利するばかりで、若者を非常に不安定な地位におとしめるものだという理由からである。労働組合だけではなく、大学生の組織もただちに反対を表明した。こののち、約3ヶ月にわたって、労働者、大学生、また高校生をもまきこんで、政府に対してこの法案の撤回を迫る一大運動が展開されることになるのだ。

今、世界では、特にアメリカを中心として、新自由主義といわれるものが力を持っている。すべてを市場原理にまかせて、労働者の解雇なども、企業の都合でいとも簡単に行なわれている。こんな世界のすう勢に対して、フランスでは、新自由主義的な考え方に対して断固反対し、労働者の権利を守ろうとする考え方が、強固に存在する。それは、フランスにおける長い労働運動の歴史の中でつかわれてきた考え方でもある。

私たち日本人の目から見て、政府が提出した一法案が、フランス全土をまきこむこれほどの反対運動に発展するというフランス的現実には、なかなか理解できない。普通の日本人は、フランスというと、グルメやファッションを連想するが、フランスは、デモやストが日常的に行なわれる国でもあるのだ。パリ観光を楽しみに出かけた日本人が、お目当ての場所が突然ストになり、その場所が見られなかったなどという新聞記事もたまに目にする。

さて、2006年1月から約3ヶ月にわたって展開された反対運動では、全部で5回も全国的な大規模なデモ(manifestation)が行なわれた。労働者・大学生・高校生たちは、各々、デモに参加する人々をきちんと組織化し、全国統一行動デーを設定し、整然とデモを行なったのだ。こういう場合のフランス人の組織力は、目をみはるほどすごい。

「フランス人というのは、すぐに激昂するという短所をもつが、怒りも人間的感情と寛大に受けとめて根にもたないという長所をもつ。とくに闘いでは、全体の勝利のため互いに個別の諍いを忘れる、という成熟性を発揮する。感情の起伏は激しいが、感情を理性で乗り越えるのである。」(注6)

「普段のフランス人はアバウトの上なく、細

やかなオーガナイズは大の苦手だというのに、いざ闘いとなると恐ろしいオーガナイズ力（組織する力）（注7）を発揮するから、おもしろいものである。アバウトさは変わらないのだろうが、アドリブ的機動性、臨機応変の行動力、政治的判断力がすごいのである。」（注8）

ところで、第1回目の全国統一行動デーのデモの参加者は40万人。第2回目は100万人。第3回目は150万人。第4回目は300万人。そして最後の、4月4日に行なわれた第5回目のデモの参加者はなんと310万人！そしてついに2006年4月10日、この法案は撤回され、正規雇用促進策などの別の措置に置きかえられた。反対運動を行なった側の完全な勝利に終わったのである。

山本氏は、これらひとつひとつの運動の流れをていねいに追い、ついにこの法案が廃案になるまでを、臨場感あふれる筆致で描き切っている。

以上、

- 1) 都市の郊外の若者たちによる暴動について
- 2) 「若者の雇用に関する法案」に対する若者たちの反対運動について

簡単に紹介してきた。山本氏は、これらの暴動や運動を、中立的な立場から描くのではなく、これらの暴動や運動の担い手である若者たちを全面的に支持する立場をとっている。この、山本氏のこれらの暴動や運動に対する向き合い方が、この本を、これらの暴動や運動の担い手たちの顔を私たちにリアルに伝えてくれるものになっていると思う。

山本氏は、日本における若者たちの置かれた状況、とくに、若者の雇用の問題にも深い関心を持っており、日本ではまだまだ孤立しがちな若者たちの闘いにも、深くて熱いエールを送っている。

〈注〉

- 1) 山本三春『フランスジュネスの反乱－主張し行動する若者たち (La révolte de la jeunesse française)』、大月書店、2008年。

フランスジュネスのジュネスは、フランス語で若者という意味である。

- 2) 2005年11月7日の朝日新聞の記事「孤立深めた「同化主義」より。
- 3) たとえば、以下のような新聞記事があった(すべて朝日新聞)。

「イスラム過激派「影響薄い」大勢／移民ら生活困窮・ミニ暴動は日常」(2005/11/9)

「フランス揺れる治安／「暴徒」幼い素顔／郊外の10代中心・家や社会に不満」(2005/11/9)

「フランス暴動／共存への重い試練」(2005/11

／10の社説)

「フランス暴動／移民社会とのパイプ欠く」(2005/11/13 社会科学高等研究院ウィエビオルカ氏(社会学)の記事)

「「ミニ郊外」マドレーヌ地区で聞く／移民に越えがたい壁(中学教師の言葉)／助成金減で運営難に(住民委員会の言葉)」(2005/11/18)など。

- 4) 山本氏はこの本の中で、有名サッカー選手であるリリアン・テュラムの、この暴動に対する言動を取り上げている(pp.61-68)。テュラム自身、カリブ海に浮かぶフランスの海外県グアドループ島出身であり、9歳の頃、家族と共にフランスにやって来て、パリ郊外の団地で育った。彼は、この暴動に対する政府の対応を厳しく批判し、また暴動に参加した少年たちに対しては、選挙人登録をして選挙に行き、草の根から政治を変えようと呼びかけている。
- 5) 山本『フランスジュネスの反乱』、p.84。
- 6) 前掲書、pp.131-132。
- 7) 「組織する力」という言葉は、安藤が付け加えた。
- 8) 山本『フランスジュネスの反乱』、p.136。

〈参考文献〉

- 1) 山本三春『グリ、ときどきグランボー ガイドブックにないフランスの素顔』、本の泉社、2000年。
- 2) 山本三春『フランスサッカーの真髄－ブルーたちからのメッセージ』、本の泉社、2002年。
- 3) 宮島喬『移民社会フランスの危機』、岩波書店、2006年。
- 4) 陣野俊史『フランス暴動－移民法とラップ・フランセ』、河出書房新社、2006年
- 5) 堤未果『ルボ貧困大国アメリカ』、岩波新書、2008年。

